

学びを実感し、活用の意欲が高まる国語科学習
～指導計画・交流・評価の工夫を通して～
大阪市立高津小学校 藪下 泰弘
Ⅰ はじめに

近い将来、超少子高齢化により人口が大幅に自然減少する。人口減少に伴い、地方の消滅危機、産業構造の変化や格差の拡大やその固定化が進む。このように社会が複雑かつ激しく変化し、その変化の見通しがさらに難しくなることが懸念される。その懸念を踏まえ、次期改訂が目指す新学習指導要領の育成すべき子どもの資質・能力は、学びの量とともに、質や深まりが重要であり、「子供が『どのように学ぶか』についても光を当てる必要がある」と述べている。その認識のもと、「主体的に課題を発見し、その解決に向けて協働的に学ぼう」とする姿勢を継続して育てていかななくてはならない。

以上を鑑みた上で、児童が学びを実感し、「学び得た知識や技能を他の場面で生かしたい」と思う授業づくりに指導者は励まなければならない。このような授業づくりを展開するとき、児童が「もっと考えたい」「もっと書きたい」「もっと伝えたい」と、より主体的に活動する方法を考える必要がある。しかし、国語科は算数科のように学習内容の系統性が認識しにくく、解決すべき問題や学習課題をはっきりさせにくい教科の特性を持っている。そのため、児童が「学んだことを使ってみよう」「なるほど、この学びをここで、使ってみようか。」と児童自身が意識しながら学習を進めることは、なかなか難しい。そこで、日々の授業の中で工夫しやすく、実践できることとして、指導計画と交流、評価に目をつけた。

以上を踏まえ、本研究のテーマを「学びを実感し、活用の意欲が高まる国語科学習～指導計画・交流・評価の工夫を通して～」とした。

Ⅱ 研究の基本的な考え方とその仮設

大阪市小学校教育研究会国語部の高学年委員会（平成 27 年度）の取り組みの成果として以

下のことが挙げられる。

「目的にあった本を選んで収集した情報を活用し、表現技法を使って効果的に伝え合う学習」

（単元名：『和の文化』マイスターになろう（『和の文化を受けつぐ』中山圭子 東京書籍 5 年）

この指導では、筆者が「表現の工夫を通してどのような内容を伝えたいのか」を考えることができる学習課題を設定する。児童は必ず課題に対する自分の考えをもった上で、その意見を交流する。交流の形態として、児童一人一人の考えを整理するためにペア学習をした後、全体交流を中心に学習を進める。話合いで深まった「表現の工夫」を付箋に書き溜めておく。これらの学びを並行読書時の『『和の文化』調べ』で生かし、『『和の文化』マイスターブック』作りに生かせるようにした。また、指導計画の工夫として、教材文で「表現の工夫」を学んだ後、その次の時間には「並行読書」と『『和の文化』マイスターブック』作りを行い、「習得と活用」をセットにして学習を進めた。

その結果、以下のような成果を得た。

- 習得と活用を交互に行う指導計画を設定したことで、表現の工夫を意識して並行読書をしようとしたり、説明する順序（構成）を考えたりできた。活用したい情報を付箋に書き溜めることで、『『和の文化』マイスターブック』作りの際、情報の選択・類別・順序決めがしやすくなり、学んだことを意識して使おうとする姿勢が顕著に見られた。
- 単元全体を通して（前後の）ペア交流→全体交流→（隣の）ペア交流→全体交流をすることで、思考の行き詰まりを防ぎ、全体交流の活性化につなげることができた。
- 評価基準を児童がわかりやすい言葉や内容にすることで、自らの学びを客観的に振り返ることができた。また、児童に学習アンケートをとることにより、児童や授業者が「学習目標が達成したかどうか」を判断するための自己評価になった。

平成 27 年度、私は 5 年生を担当しており、この研究に携わった。実際に

- ① 習得と活用を交互に行い、
- ② ペア交流や付箋の活用を取り入れ、
- ③ 評価基準を明確にして

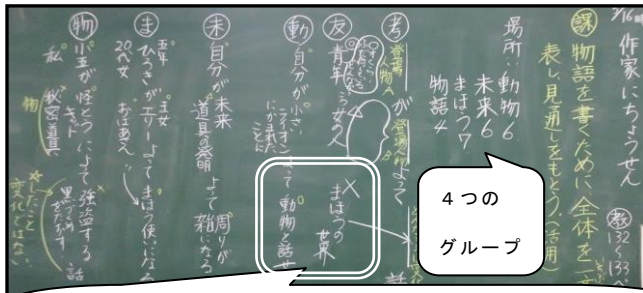
学習活動を展開することで、以下のような成果をあげることができた。【資料①】

[illegible]

【資料③：初発の感想を交流した板書】

・詳しく書きすぎるとわかりにくくなることがわかった。
次（自分で物語を書くとき）は、短くまとめたい。

(4) 自分の書きたい物語を一文で表す(6時:活用)

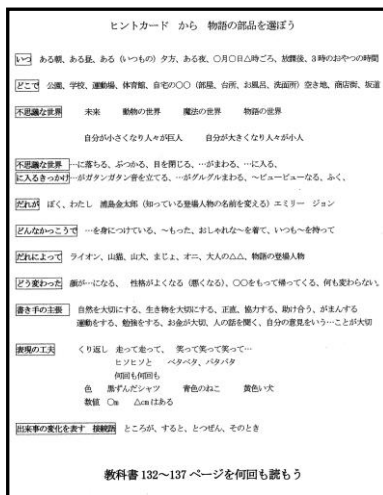


違いを比べ、変化がわかるものに「○」そうでないものに「×」をつけ、
『変化の意味』が理解できた」のは「発表者のおかげだ」と褒めた。

【資料⑦: 自分の書きたい物語を一文で表す学習の板書】

まず、教科書にある4つの世界(動物・未来・魔法・物語)から好きな世界を選び、それぞれの世界ごとにグループを作り、班になって学習を進めた。次に、以下のヒントカード【資料⑧】

により時・場所・人物・変
化等の見通しをも
てるようにした。
想像したり書い
たりすることが
苦手な児童もヒ
ントカードから
自分に合う情報
を選び、ノート
に自分の考えを
書くことができた。

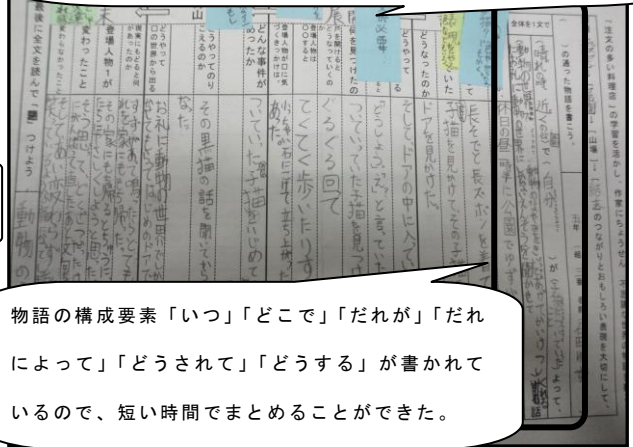


【資料⑧: 物語を書くための
ヒントカード】

一人一人が物語のイメージをもった後、4~7人のグループ【資料⑦】で交流した。『人物』と『変化』の組み合わせで、そんなおもしろい組み合わせもあるのか。」と自分と友だちの考えの違いのおもしろさに気づくことができた。全体交流では、「時」「場所」「人物」をより詳しく表現できている児童を認め、そのよさをクラス全体に広げるようにした。また、「変化」が十分に表現できていない児童には友だちの例示により、何がどのようによいか評価したり、どのように変えればよいかを提案したりした。
【資料⑨】このように児童は板書に書かれてあることとヒントカードを関連づけながら、不足している情報を付け加えていた。最後に以下のワ

ークシートに物語作りの一文をまとめるように指示した。【資料⑨】

物語の構成毎に書く観点が示してあるので、見通しをもって物語が書けるようになっている。



物語の構成要素「いつ」「どこで」「だれが」「だれによって」「どうされて」「どうする」が書かれているので、短い時間でまとめることができた。

【資料⑨: 物語を書くときに用いたワークシート】

<児童の感想>

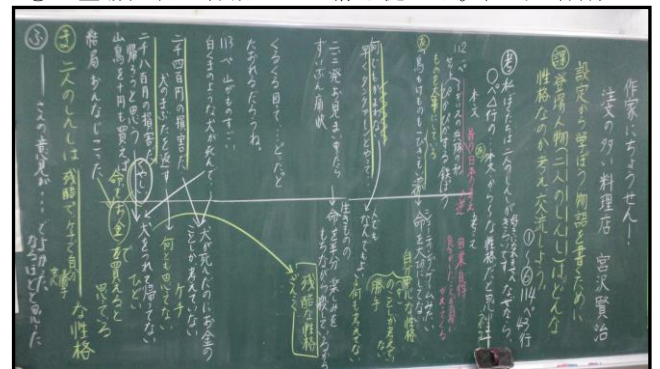
・「どう変化したか」で「魔法の世界にいく。」だけではダメで、Aさんのように「魔法使いになる」と変化していることを書かないといけないとわかった。

<児童の考えた物語の一文の実際(グループ: 動物)>

・晴れた時、公園で、私が子猫についていったことによって、動物の世界に行き、その動物の悩みを聞いてあげて、解決してあげることで、動物の世界にしかない演奏を聞かせてくれる話

(5) 教材文から「登場人物の心情や役割」「表現の工夫」を学び、その学びを物語作りに生かす(7~14時)

① 登場人物の行動から心情を捉える。(7時:習得)



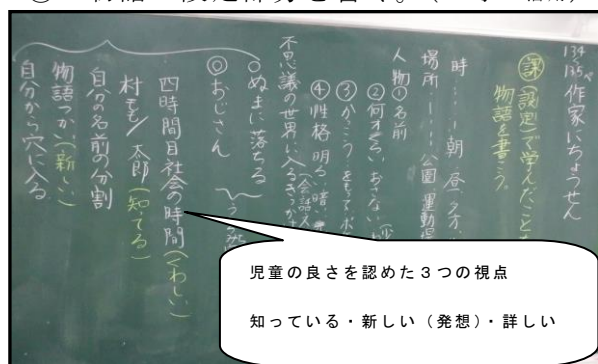
【資料⑩: 登場人物の行動から心情を捉える学習の板書】
ペア→全体→ペア…というように交流を

した。ペアで交流することで、短時間で、友だちと自分の考えを比べることができた。

二人なので、友だちの意見に対して、賛成や質問がグループよりも言いやすく(確認し

やすく)なり、自信がよりもちやすくなった。自信が発言意欲につながり、交流が活発になった。この主体的な交流によって、叙述に書かれてあることの他に「二人の紳士が死んだ犬を連れて帰っていないこと」にも気付くことができた。【資料⑩】この気付きや叙述同士を関連付けて読むことで、二人の紳士が「自己中心で残酷な心」を持っていることを正確に捉えることができた。【資料⑩】

② 物語の設定部分を書く。(8時：活用)

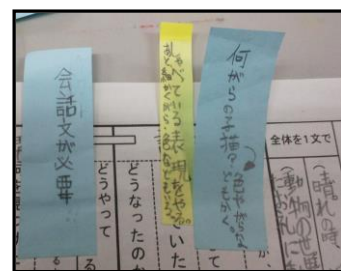


【資料⑪】：「物語の設定部分を書く」学習の板書

物語を書く(活用の)時間は、「動物(6人)・未来(6人)・魔法(7人)・物語(4人)【資料⑦】」の4つのグループに分かれて、いつでも交流できる状態で授業を進めた。まず、前々時(6時)に書いたノートやワークシート【資料⑨】とヒントカード【資料⑧】を振り返り、「時」「場所」「人物」「不思議な世界に入るきっかけ」を詳しく書くことを本時の達成目標であることを全体で共通理解をした。次に「①名前②何歳くらいか、③どんなにかっこうか、④どんな性格か」を板書した。このように箇条書きを用いる【資料⑪】ことで、登場人物像をより想像しやすくし、詳しく書けるように工夫した。その次に設定部分を書く前に書こうと思っていることをグループ内で「上記の①～④の視点」で交流した。その後、全体でも発表できるようにした。こうすることで、登場人物像を詳しく書くための知識を共有できるようにした。交流後、時間を決めて、物語を書くように指示した。その後、もう一度、グループ交流を行い、班毎に、上手に書けたと思う児童を推薦して、全体で発表できるよ

うにした。指導者は良いものは何が良いのか具体的に認めながら板書した。【資料⑫ふきだし】

最後の振り返りでは、次の学習に生かしたい学びを付箋に書いてワークシートに貼ることができるようにした。【資料⑫】



【資料⑫】：学びを記した付箋1

＜児童の気付き＞

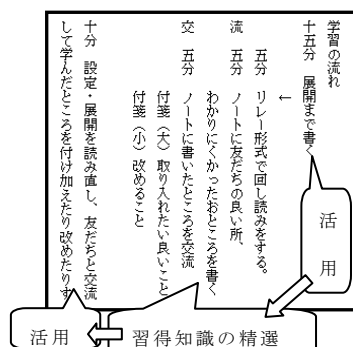
- ・性格がわかるためには会話文が必要。
- ・「いっぱい」より「数」を書くほうがよい。

③ 展開部分の表現の工夫を学ぶ。(9時：習得)

7時と同様にペア→全体→ペア…の流れで交流をした。児童が色に着目することができるよう言葉がけを行った。交流の中で、「水色の戸→黄色の字→赤字」の変化が「安全→注意→危険」というように身近な信号器の色と似ていることに気付くことができた。このように「色から想像を広げること」や「色に作者の意図が入っていること」を児童は実感することができた。

④ 物語の展開部分を書く。(10時：活用)

前々時の8時と同様に物語を書く4つのグループ〔動物(6人)・未来(6人)・魔法(7人)・物語(4人)〕になった後、右図【資料⑬】のような学習の流れを黒板に提示し、見通しをもって学習活動に取り



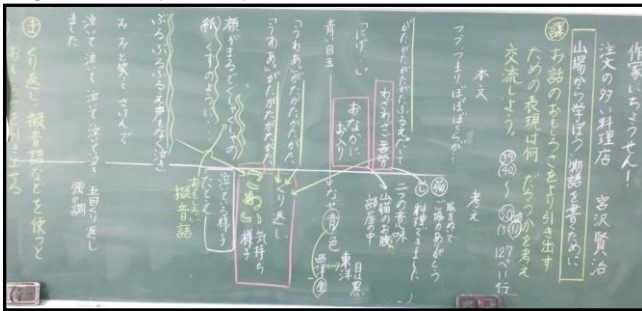
【資料⑬】：活用時の1時間の流れ

組めるようにした。この活動では「①付箋を読み返して物語を書く(活用)→②友だちの物語を読む・交流(習得)→③気付き(自分の物語作りで生かしたい友だちからの学び)をノートや付箋(習得知識の精選)に書く→④気付きを生かして物語を書く(活用)。」

【資料⑬】このように目的に合わせた交流やメモ(習得知識の精選)を行うことで、自分にとって必要な「表現の工夫」や「物語の書き方」を短時間で学ぶことができた。また、物語作

りに行き詰まりを感じた際には、手軽にグループ内の友だちの作品を読み返し、物語を書くための知識や技能を共有し合うことができるので、どの児童も書く見通しを持ち続けることができた。その結果、指導者が個別に支援しなくても、最後まで活用する意欲を高め続けて学習活動に取り組むことができた。

⑤ 山場部分の表現の工夫を捉える (11 時：習得)

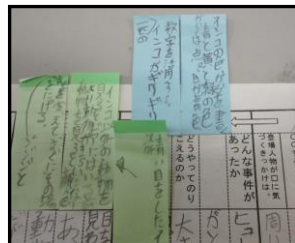


【資料⑭：山場部分の表現の工夫を捉える学習の板書】

7・9 時同様にペアと全体の交流を交互に繰り返し行うことで「…つ、つ、つ、まり」「ぼ、ぼくら…」「泣いて泣いて泣い…」「ぶるぶる」「がたがた」等、「繰り返し」や「擬音語」を使うことで物語がおもしろくなり、作者の意図を読者に伝えることができることに気付くことができた。【資料⑭】

⑥ 物語の山場部分を書く。(12 時：活用)

グループ交流
後の付箋の記述
には「繰り返し」
や「擬音語」だ
けでなく、前々
時で学んだ「色」



【資料⑮：学びを記した付箋 2】

にも着目した付箋の書き込みが見られた。児童は書き溜めた付箋を読み返し、学びを主体的に活用できるので、指導者の声かけがなくても最後まで物語作りに取り組むことができた。【資料⑮】【資料⑨】

<児童の感想>

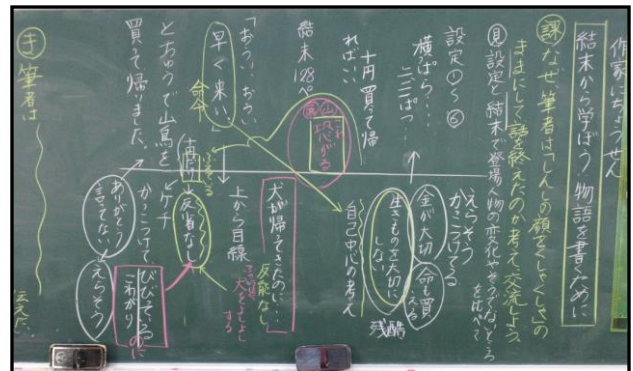
- ・擬音語を使うと「想像しやすい」と言ってくれたので、これからも活用していきたいです。

⑦ 変化(結末)の理由を捉える (13 時：習得)

設定と結末で登場人物の変化したところとそうでないところを比べて読むよう

に指示を出し学習を進めた。

ペアと全体交流を繰り返す中で、児童は「二人の紳士の考え方(人間性・性格)が変わっていないこと」に気付くことができた。



【資料⑯：変化(結末)の理由を捉える学習の板書】

学習の振り返りでは、黒板にある字を活用して、まとめることができた。【資料⑯】

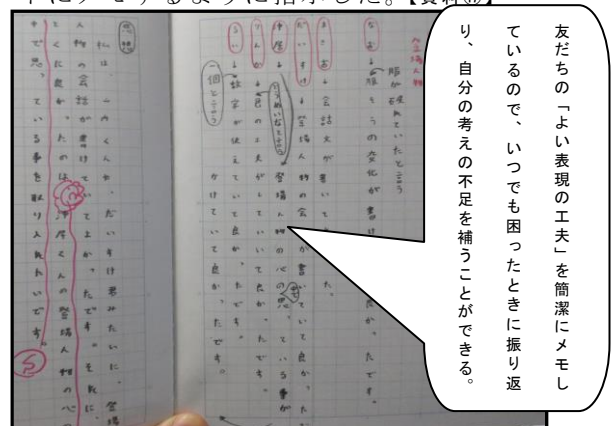
<児童のまとめと感想>

- ・筆者は、命を大切にすることを伝えたい。
- ・筆者は二人の紳士が反省をしていないから顔をくしゃくしゃにして直さなかったと思う。
- ・筆者は自己中心的な考え方や命を大切にしない考え方はダメと伝えたいんだと思う。

このように7・9・11・13時の登場人物の心情と場面の相互関係や表現の工夫についての読み取りでは「一人学び」を活用し、「ペアと全体交流」を繰り返すことで、単元の目的に合った知識や技能を習得することができた。

⑧ 物語の結末部分を書く。(14 時：活用)

(8・10・12時を含め、)14時の物語を書く際(活用)にはペアではなく、必ずグループ内で友だちの物語(作品)を、回し読みをして「うまく使っている表現の工夫」をノートにメモするように指示した。【資料⑰】



【資料⑰：友だちの物語を読んで書いたメモ】

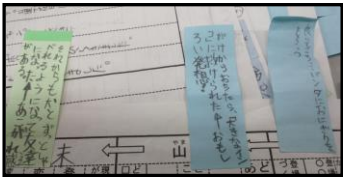
児童は気付いたことをメモすることで、どのように表現の工夫を使えばよいか、自分に何が不足しているのかを具体的に自覚することができた。また、授業の最後に全体で振り返り活動を行うことで、指導者は児童の作品の良さ（表現の工夫・気付き）をクラス全体に認め広げることができた。

＜児童の気付き・感想＞

- ・「服が破れていた」という変化が書かれてあってよかった。
- ・会話がたくさんあってよかった。
- ・登場人物が心の中で思ったことが書かれていてよかったのでわたしもこれを取り入れたいです。
- ・「透明な」という色の工夫がかいてありよかった。
- ・「一個」と数字がかけていてよかった。
- ・私は、色や様子を表す言葉を使っていなかったのに、結末でも使いたいです。

このように授業の最後にノート

のメモから次の時間に生かしたい表現の工夫や友だちの作品を読んで、



【資料⑭】：アイデアを記した付箋

浮かんだアイデア（おもしろい発想）をメモするようにも指示した。次時では前時の学びが付箋【資料⑭】に書き溜めてある。それらの付箋を読み返すことで、自らの活動の見通しや課題に気付き、楽しみながら、「物語作り」の活動に取り組むことができた。

（6）評価基準（達成目標）を明確にして、作品を読み合う（交流する）ことで、付いた力や学びを実感する。（14・15時）

友だちの作品を読み、評価基準を基に友だちに身に付いた力を捉えた。さらに、物語で印象に残ったものをメモして、互いの良さを認めることができています。

☆ おもしろ物語ナンバーワンを見よう						
5年 名前 ()						
名前 / 観点 (評価基準)	①	②	③	④	⑤	友だちの作品の内容を聞いて心に残ったこと(観点をもとに)
1	A	A	B	B	A	主人公の行動一つに、場が変化する
2	A	S	A	B	B	大が矢張り表現の工夫が、良かった
3	B	A	A	B	A	最後、友達とあんなに楽しかった
4	A	S	A	B	A	とても強くて、おもしろい、どんな本をよめばいいかな
☆	A	S	A	B	A	表現の工夫が多く、物語が面白かった

観点 (評価基準)

①「設定」「展開」「山場」「結末」がわかるように話が書かれている。

② 様々な表現の工夫が○以上使えている。 5つ以上S 4つ以上A 3つ以上B 2つ以上C 1つ以上D 0点

③ 短文で構成されていて、だれが何をするのかよく伝わる。

④ 「書き手のメッセージ」が強く伝わっているか。例：○○を大切にしましょう。△△をしてはダメだよ。

⑤ 物語を読んだり、聞いたりしたとき、おもしろい、次はどうなるんだろうかと思えた。

【資料⑮】：児童が振り返った評価基準

このように友だちの作品を読む際には評価する視点（評価基準）をワークシートに記載しておき、記録しながら聞き合うことで、どんな点が良いのかを具体的に認め合うことができた。【資料⑯】

作品のあらすじ

主人公「姫子」が虹色のどんぐりをひろったことによって昔話「浦島太郎」の世界に行き、大金持ちになるお話。

会話文

「時」を表す言葉

擬音語

「どんぐり」を繰り返している。

「百種類」と数値で表すことで料理の「豪華さ」がよく伝わるように工夫している。

「ボロボロ」を二回繰り返すことで、主人公が長い間、苦勞し、一生懸命探したことがわかるようにしている。

【資料⑯】：児童の作品「どんぐりの大冒険」

学んだ表現の工夫を物語の様々なところに組み込んでいることがわかる。【資料⑯】

＜相互評価後の児童の気付き・感想＞

- ・付箋を使うと、表現の工夫や会話文をまとめやすかった。
- ・付箋を使うと簡単に物語がかけたので、付箋をまた使いたいです。
- ・私はBくんやCくんみたいに「繰り返す」や「色」を入れ、登場人物同士の会話がもっとあるといいと思いました。
- ・歩くときの「テクテク」や黄色のドアなど「色」があると想像しやすいと思った。
- ・不思議の世界に入るとき、出るときに「木にぶつかる」が使えていてわかりやすかった。

- ・表現の工夫を結末でも使うとおもしろくなることがわかった。
- ・短文を作った方が聞いていて、耳に物語の内容が入りやすかったから使っていきたい。

＜学習アンケートの結果＞（調査対象22人）

①…そう思う ②…どちらかと言えばそう思う
③…どちらかと言えばそう思わない ④…そう思わない

（1）表現の工夫を意識して使ったり、自分の考えを思うようにまとめたりすることができましたか。

①11人 ②11人 ③0人 ④0人

（2）付せんを使うことで、物語の内容をおもしろくするための気づきに役立てることができましたか。

①12人 ②9 ③1人 ④0人

（3）習得する学習、活用する学習を交互（こうご）に行うことで、「設定」「展開」「山場」「結末」の構成のイメージや理解がしやすく、物語を書くのに役立てやすかったですか。

①13人 ②9人 ③0人 ④0人

（4）この学習で学んだ説明の仕方（表現の工夫）を他の教科（社会・理科・算数）でも使っていきたいと思えますか。

①13人 ②6人 ③2人 ④1人

（5）この学習で学んだ付せんの活用方法を他の教科（社会・理科・算数）でも使っていきたいと思えますか。

①14人 ②7人 ③1人 ④0人

①「「そう思う」だけでも半数以上、「どちらかといえば、そう思う」を含むと約90%の児童が学びを実感している

ことがわかる。

※設問（4）は除く。

IV 成果（○）と課題（●）

研究の視点Ⅰ：指導計画の工夫について

- 習得と活用を交互に行ったことで、児童が「何のために学ぶのか」「何のために話すのか」「何のために書くのか」という「学習の目的に対する自覚」が深まっていき、時間を積み重ねる毎に「もっと書きたい」という学習意欲の高まりが見られた。
- 付箋を活用することで、自ら価値を感じた知識を手軽に記録し、活用したい場所へ自由に移動することができるので、児童は「与えられた知識」ではなく「学び得た知識」とより強く自

覚できた。

- ◎ 指導計画を工夫し、付箋を活用することで、児童は主体的に構成や表現の工夫の効果を考え、場面の様子や人物の気持ちが伝わるように物語を書くことができた。

研究の視点Ⅱ：交流の工夫について

- 「表現の工夫」や「登場人物の心情」を読み取る習得学習では「ペアと全体交流」を行った。ペア交流は短時間で、友だちと自分の考えの違いに気付いたり、自分の考えを整理したりできた。その結果、児童が安心感や自信をもつことができた。それらの気持ちが全体交流の活性化につながり、児童の学びや気づきをより多く促すことができた。
- 「物語を書く」活用学習では、グループ交流と全体交流を行った。グループ交流を行うことで、友だち（作品）からたくさんの「表現の工夫」や「物語をおもしろくするアイデア」を得ることができた。全体交流では、その表現の良さの意味を深く考えたり知ったりすることができた。
- ◎ 習得と活用の目的に合った対話を行い、交流を工夫することで、学びの実感を高めることができた。

（研究の視点Ⅲ：評価の工夫）

- 「何を」「どのように」「どこまで」できたかよいのかを事前に伝え、自己・相互評価をすることで、学びや到達具合をより身近なものに感じることができた。友だちと自己との対話から学びを身近に感じることで、自分の達成だけでなく、不足部分も実感することができており、次の学習への目標にもつながることが期待できる。
- ◎ 評価基準を明確にし、自分一人だけでなく、友だちと比べて学習を振り返ることができるようにすることで深い学びを得ることができた。
- 「作者のメッセージ」を伝える『変化』を意識して書く児童は少なかった。物語の面白さをさらに実感できるように、さらに指導や支援の仕方を工夫する。